

## 【序論】

高齢者の健康寿命の延伸や、地域で自分らしく生活を送ることに寄与する社会活動の1つにボランティア活動が挙げられる。高齢者同士の支え合いを実現するためにも、高齢者のボランティア参加に対して需要が高まっている。しかし海外と比較すると日本は、高齢者や障がい者の話し相手等のボランティア活動に参加している高齢者が、3.8%と少ない状況にある(大上, 2015)。活動支援機関においても、ボランティアの募集・確保が課題であるため(社会福祉法人 全国社会福祉協議会ボランティア・市民活動支援に関する調査研究員会, 2016)、高齢者のボランティア活動への参加を促進する取り組みが重要と言える。しかし高齢者は健康状態が不安定であり、加齢に伴う変化が日常生活に影響を及ぼしやすいことなどから、参加意欲だけでは活動に至らない可能性が考えられる。そこで、本人の参加意欲の他、どのような環境や条件が地域ボランティア活動への参加に必要なのかを把握する必要があると考えた。本研究では、高齢者の地域ボランティア活動に必要なレディネスを測定できる尺度の開発を行った。活動支援者が尺度を活用することで、対象者や地域の課題が明確になり、その課題に取り組むことで参加条件や環境が整い、ボランティアに参加しやすい地域づくりにつながり、高齢者の健康増進に寄与できると考えた。

## 【目的】

高齢者の地域ボランティア活動レディネスを測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討する。

## 【研究方法】

菅原(1994)、河口(1997a)の手順を参考に、尺度の開発と信頼性・妥当性の検討を行った。具体的には、①測定対象の明確化、②項目候補の収集、③尺度の測定形式の決定、④内容妥当性の検討、⑤項目検討のための予備調査、⑥項目の統計的検討、⑦本調査、⑧信頼性の検討、⑨妥当性の検討である。

本研究では以上の手順に則り、文献検討とインタビューの結果から高齢者の地域ボランティア活動レディネスのアイテムプール 106 項目を作成し、5 名の専門家による内容妥当性の検討を行った。その結果、本尺度は【高齢者主体の無理のない活動】、【活動しやすい環境】、【個人的な活動条件】、【参加意欲】の 4 因子 29 項目から構成される独立した多次元尺度であると仮定した。これをイニシャルスケールとして、1 回目の予備調査を行い探索的因子分析により質問項目を検討した。予備調査は 2 回行い、3 回目の調査において信頼性と妥当性を検討した。

## 【結果】

### 1. 1 回目の予備調査

調査対象者は北海道の政令指定都市と中核市以外の平均高齢化率 31.7% (2022 年 1 月時点) を上回る町村に住む 65 歳以上で、ボランティア活動に参加しておらず、コミュニケーションに支障のない方とした。対象地域は Microsoft® Excel® 2019 Ver.16.0 を用いた無作為抽出法により選定

し、対象者は原則 1 町村 10 名とした。対象地域の自治体、社会福祉協議会、及び地域包括支援センターへ対象者の紹介を依頼し、協力の得られた高齢者に電話で 10 分程度の調査を行った。調査にあたり、研究者が所属する機関の研究倫理委員会の承認を得た(承認番号 020-364)。

調査は、自治体・地域包括支援センター12カ所、社会福祉協議会7カ所の計19カ所から協力を得た。紹介を受けた高齢者147名に研究の説明を行い、条件を満たし、かつ同意を得られた100名を分析対象とした。質問項目を削除すると Cronbach の  $\alpha$  係数が上昇した項目や、尖度・歪度が  $\pm 1$  以上を示す項目が見られたが、内容的に重要な項目であると考え、イニシャルスケールの 29 項目全てを探索的因子分析の対象とした。主因子法によるバリマックス回転を用いた因子分析の結果、5 因子 21 項目が抽出された。第 1 因子は【高齢者主体の無理のない活動】8 項目、第 2 因子に【助け合える仲間の存在】6 項目、第 3 因子【互恵的感情】3 項目、第 4 因子【自己決定】2 項目、第 5 因子は 2 項目で【経済的条件】と命名した。因子間相関は、【互恵的感情】と【経済的条件】の間には有意な相関はなかった( $r = .175$ )。第 4 因子の【自己決定】は 2 項目であったため、2 回目の調査にあたり 2 項目を追加し、計 4 項目とした。第 5 因子【経済的条件】において、新たに 3 項目を追加し、計 5 項目とした。以上、5 因子 26 項目を 2 回目の予備調査の質問項目とした。

## 2. 2 回目の予備調査

対象地域は、政令指定都市と中核市を除く、平均高齢化率を上回る市とした。その他の条件や調査方法は 1 回目の予備調査と同様であるが、協力機関からの紹介が難しく、一部機縁法により対象者を確保した。また、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着いていた一部の地域において、対面調査を実施した。調査にあたり、研究者所属機関の研究倫理委員会の承認を得た(承認番号 021-377)。

調査は地域包括支援センター4カ所、社会福祉協議会12カ所の計16カ所から協力を得た。協力機関からの紹介83名の他、機縁法による18名の高齢者を対象とし、計101名とした。

分析方法は1回目の予備調査と同様である。性別で有意差のある項目( $U = 773.5, p = .0004$ )等、3項目を除外した23項目で探索的因子分析をした結果、4因子20項目が抽出された。第1因子は【条件に適した無理のない活動】9項目、第2因子【経済的条件】は5項目、第3因子【助け合える仲間の存在】4項目、第4因子の【互恵的感情】が2項目となった。4つの因子のうち複数の因子間で弱い相関( $r = .247 \sim .369, p < .05$ )があった。3回目の調査に向け概念を測定するために、第4因子の【互恵的感情】に2項目を追加した。また、第1因子の「ボランティア活動に参加したい」は、属性で問うこととし、第3因子の「経済的な保障があるならボランティア活動に参加したい」は、他の質問項目と内容的に重複するため削除した。これらにより、4因子20項目を3回目調査の質問項目とした。

## 3. 3 回目の調査と信頼性・妥当性の検討

3 回目の調査の対象者は、政令指定都市と中核市以外の平均高齢化率を上回る市町村に暮らす高齢者で、その他の条件や方法は 1 回目の予備調査と同様であり、研究倫理委員会の承認を得た(承認番号 021-384)。

対象は、自治体または地域包括支援センター8カ所、社会福祉協議会29カ所の計37カ所から

紹介を受けた 354 名のうち、対象者の条件に該当し、かつ同意の得られた 205 名とした。

尖度が 4.83 を示した 1 項目を除外し、19 の質問項目を探索的因子分析した結果、4 下位尺度 16 項目が抽出された。【条件に適した無理のない活動】8 項目、【助け合える仲間の存在】が 3 項目、【互恵的感情】3 項目、【経済的条件】が 2 項目である。なお、【互恵的感情】と【経済的条件】の間に有意な相関はみられなかった ( $r = .03$ )。

3 回目調査の対象者のうち同意を得た 49 名に再検査法を実施し、各下位尺度の相関係数を求めたところ、 $r = .405 \sim .638 (p < .001)$  が示された。各下位尺度における Cronbach の  $\alpha$  係数は .741 ~ .916 であった。

本尺度の適合度指数は、GFI = .863、AGFI = .810、CFI = .904、RMSEA = .102 であった。また、既知グループ法により判別的妥当性を検討した。男女に分けて尺度の合計得点の平均値を比較したところ、男性 79 名の平均値は 66.3 (SD11.05)、女性 126 名の平均値は 63.0 (SD11.03) で、男性の平均点が有意に高かった ( $U = 4265.00, p = .0085$ )。同様に、日常生活を送る上で身体の不自由がある群とない群に分け比較したところ、身体の不自由がある群の平均値は 64.5 (SD11.02)、身体の不自由がない群の平均値は 62.7 (SD11.11) であり、両群の平均値に有意な差は見られなかった ( $U = 2628.50, p = .0822$ )。

#### 【考察】

3 回の調査を経て、本尺度は【条件に適した無理のない活動】、【助け合える仲間の存在】、【互恵的感情】、【経済的条件】の 4 下位尺度から構成された。仮説構成概念では、独立した下位尺度を有するとしており、実際に 1 回目と 3 回目の調査結果では【互恵的感情】と【経済的条件】の間に有意な相関が見られなかったため、仮説に近い構造が示された。これにより、本尺度は合計得点を算出しないで下位尺度毎に得点を出し、下位尺度を総合的に判断する尺度であった。

【条件に適した無理のない活動】は、当初【高齢者主体の無理のない活動】としていたが、高齢者の強みを活かせる内容や、負担がないなど、高齢者に適した条件の活動を表す質問項目から構成されたため、内容的に仮説構成概念との相違はないと考えられる。【条件に適した無理のない活動】が第 1 因子として抽出された理由として、身体機能の低下や健康不安を抱える高齢者にとっては、家族に迷惑がかからない無理のない範囲で、自分の能力を活かせるという条件が重要であるからだと考えた。

次に、【助け合える仲間の存在】は、「知り合いと一緒に参加できるならボランティア活動に参加したい」などの人的環境から構成される概念となった。仮説構成概念では、【活動しやすい環境】として、アクセスの良さやサポート体制など様々な環境が含まれていたが、これらは内容的に異なるため、高齢者にとって重要度の低いものは削除されたと考えた。

【互恵的感情】は、仮説構成概念では【参加意欲】と表現していた。その内容は「相手の役に立ちたい」、「社会へ対する恩返し」などであったため、内容的な相違はないと言える。

【経済的条件】は【活動しやすい環境】に属していた質問項目から構成されるが、前述のとおり、

【活動しやすい環境】は内容的に異なるものが含まれていたため、因子分析により第4因子に【経済的な条件】が抽出されたと考えられる。この因子は質問項目が2つであり、概念を測定するために項目の追加が必要である。

尺度の信頼性について、Cronbachの $\alpha$ 係数を求めた結果、各下位尺度全てが.70以上を示したため、内的整合性は確保できた。また、尺度の安定性は再検査法により $r = .405 \sim .638 (p < .001)$ が示されたため、下位尺度の一部に安定性の不十分さはあるが、信頼性は概ね確保されたと考える。

内容妥当性は、尺度の開発手順に則っていることから本尺度の作成過程は適切であり妥当だと言える。既知グループ法による判別的妥当性は確保できなかったが、モデル適合度においてRMSEM以外は良好な結果であったことから、若干の不十分さはあるつつも妥当性は確保されたと言える。

#### 【結論】

1. 高齢者の地域ボランティア活動レディネス尺度は、4下位尺度16項目から構成された。下位尺度は【条件に適した無理のない活動】8項目、【助け合える仲間の存在】が3項目、【互恵的感情】3項目、【経済的条件】が2項目である。【互恵的感情】と【経済的条件】の間に有意な相関はないため、本尺度は仮説構成概念に近い、独立した下位尺度を有する尺度であった。これにより本尺度を活用する際は、下位尺度毎に得点を出し総合的に判断する必要がある。
2. 尺度の信頼性について検討した結果、Cronbachの $\alpha$ 係数は各下位尺度で.741～.916であり、内的整合性があることが確認できた。安定性は再検査法により $r = .405 \sim .638 (p < .001)$ が示され、下位尺度の一部に安定性の不十分さはあるが、信頼性は概ね確保されたと考える。
3. 本尺度は、尺度の開発手順に則っていることから内容妥当性が得られたと考えられる。確認的因子分析の結果、本尺度の適合度指数はGFI = .863、AGFI = .810、CFI = .904、RMSEA = .102であった。RMSEA以外は良好な結果を示したことにより、構成概念妥当性は概ね良好な結果と考えられる。判別的妥当性は、既知グループ法により検討を行ったが、仮説は支持されず、今後も検討を要する。これにより、若干の不十分さはあるが、本尺度の妥当性は確保されたと考えられる。以上から、本尺度を用いて、地域でボランティア活動に参加する際の高齢者のレディネスがどの程度整っているか検討するツールとして使用することが可能であると判断された。